浜松歴まち散歩

歴史的風致広報 第004号

初生衣神社織殿保存修理事業（市指定有形民俗文化財）

三ケ日町の社寺と祭礼にみる歴史的風致

猪鼻湖の北側、国登録有形文化財に登録されている天竜浜名湖鉄道三ヶ日駅周辺の市街地は、江戸時代には姫街道の宿が置かれるなど、三ヶ日地域の中心として賑わいを見せています。

また、当地域は、伊勢神宮と関わりの深い地域です。浜名惣社神明宮や初生衣神社が位置し、伊勢神宮の荘園が置かれた地でもあり、古くから人々が生活を営み、祭礼を継承してきた歴史ある地域です。

■遠州織物の聖地「初生衣神社」織殿保存修理事業

令和七年（二〇二五）一月二五日、初生衣神社織殿（市指定有形民俗文化財）の竣功奉告祭が行われました。

織殿は、かつて伊勢神宮に奉献される御衣を織る際に使用されていた享和元年（一八〇一）建設の茅葺屋根が特徴の建物です。建設から二百年以上経過し、屋根だけでなく建物本体も老朽化が著しく、倒壊のおそれがあったことから令和五年度（二〇二三）から二カ年度にわたり保存修理事業を行いました。

初生衣神社では鈴木栄男宮司の発案で、おんぞ奉賛会の再興、織殿修復等境内整備実行委員会の立ち上げに始まり、クラウドファンディングやＰＲ動画の作成などウェブ・ＳＮＳを活用することで、広く初生衣神社を知ってもらうための情報発信を行い、多くの賛同者を得ることができました。

「おんぞ祭」は初生衣神社から浜名惣社神明宮まで、神官を先頭に※「太一御用」の幟・唐櫃・奉納幟を持った人々が向かいます。歩いて五分程度の浜名惣社神明宮の摂社（織物の神）に「赤引きの糸で織った御衣」を奉納し、その後唐櫃に移し初生衣神社に戻ります。

そこから神事の始まります。唐櫃から「御衣」を本殿に奉納します。ゆったりとした優雅な浦安の舞などがあり、餅投げで終わります。

遠州織物発祥の地として、地元と織物業界の祭典となっています。

※太一御用 天照大神の御使いの意味

■伝説　宮中の妖怪「鵺」退治と鵺代

仁平三年（一一五三）宮廷に出没する妖怪退治の勅命を受けた源頼政は、神服部家の秘術「鏑目」を伝授され、妖怪を退治した。頼政は「三位」に仰せられ、三ケ日の鵺代一帯を賜った。

源三位頼政は、お礼に神服部家に伊勢神宮初生衣領を寄進し、岡本へ迎え入れた。さらに、天皇から伊勢神宮へ「神御衣和妙」を神服部家から献納をと勅令を受けたことから神服部家は初生衣神社を創建した。

■発行／浜松市都市整備部　土地政策課　景観・歴史まちづくりグループ
電話〇五三―四五七―二六五六

水窪のまち並み

10.中央構造線沿いに点在する集落の祭礼と信仰にみる歴史的風致

佐久間・水窪地域を縦断する中央構造線沿いの山村集落を舞台に特徴的な民俗芸能が継承されている。

西浦の田楽

秋葉山常夜灯の祭祀

11.秋葉信仰にみる歴史的風致

火防の神として信仰を集める秋葉山及び常夜灯が残る参詣道沿いの集落では、秋葉信仰と関係する伝統行事が継承されている。

小松鳥居祭

寺野のひよんどり

12.遠江のひよんどりとおくないにみる歴史的風致

都田川・阿多古川沿いの中山間地域の寺堂などを舞台に、生業と関係する正月行事が、継承されている。

川名のひよんどり

■来年度の予定

歴史まちづくり担当では、来年度から市民の皆様と歴史まちづくりに関する情報を共有し、歴史的風致維持向上の活動を活性化できればと考えています。

例えば『浜松市歴史的風致維持向上計画』の歴史的風致の範囲をフィールドに、「歴まちフォーラム」「歴まち検定」「歴まち散歩」「歴まち研修」（いずれも仮称）などの企画を検討しています。

また、市内で歴史まちづくり活動に取り組んでいる団体を構成員とする「歴まち連絡協議会」（仮称）を構想しています。各団体が繋がることで、地域ごとの情報発信と拠点づくりの促進が期待されます。

【今後の予定は六月ころ発行予定の歴史的風致広報にてお知らせいたします】

編集後記

群馬県の富岡製糸場の隣の下仁田町に荒船風穴があり、風穴の冷たい風で蚕の子の成長を管理していました。下仁田の民俗資料館には全国に発送していた記録が残っておりました。遠州三河地方は全国でも五本の指に入る量でしたと話してくれました。

遠州三河の織物の発展には、壮大な桑畑が必要です。三ヶ日のみかん畑と豊橋のかき畑はすべて桑畑だったと言われています。

この歴史的風致を背景に豊田織機、鈴木織機が創業し、いずれも世界の自動車産業の牽引役になっています。

歴まち認定都市の広報、理解促進を目的に使用するロゴマークです。

奥浜名湖の赤引きの糸にみる歴史的風致

初生衣神社　おんぞ祭

伊勢神宮まで運ぶ三河と遠州の連携

「太一御用」の幟を先頭に、浜名惣社神明宮に御衣を迎え入れる行列が「御衣祭り」です

初生衣神社の例祭は『御衣祭』と言い、四月第二土曜日に催行されています。赤引きの糸（絹糸）を「織殿」で織り上げ、唐櫃に入れ浜名総社神明宮まで「太一御用」の旗を立て唐櫃を担いだ行列が浜名惣社神明宮摂社の天棚機姫命社殿まで行きお祓いを受け、再び初生衣神社へ戻り本祭が始まります。

天棚機姫命社に納めてお祓いを受ける

三ヶ日町岡本の村人が御衣を伊勢神宮に送り出す一大神事である「おんぞ祭」は春の風物詩です。

そもそも赤引きの糸とは赤い色の糸ではありません。「赤」は「明」のことで、光って美しく清浄な糸をさします。また初めてのものや初々しいものをいい「赤ちゃん」もその赤です。日本蚕糸史には、赤引きの糸とは神衣を織るに用いる「青く光りある糸とある」

旧鳳来町の大野には服部神社があり、その地域は服部郷と呼ばれ沢山の桑が自生していました。山繭から取れる生糸を紡がれていてその品質が優秀で赤引きの糸と呼ばれました。

浜名惣社神明宮から初生衣神社へ戻る

弘法大師が全国巡歴の途中、この地で温泉を見つけました。赤引きの糸を紡ぐ人たちが、この湯に浸かり身を清めてから作業していたことから、赤引き温泉と伝えられてきました。

この赤引きの糸は三ヶ日の瓶割峠をへて初生衣神社に運ばれました。

初生衣神社の由緒が、神社入り口の立て札に次のように記しています。

「当社は往古より浜名神戸の地に鎖座、伊勢神明初生衣神社亦浜名斎宮（さいぐう）とも称され、機織（はたおり）の祖天棚機姫命（たなばたつめのみこと）を祭る。神服部家の旧記によれば、久寿二年（一一五五）以来、境内の『織殿』において、三河の赤引の糸

初生衣神社での祭典

をもって御衣を織り、八百年の長い間、皇大神宮に奉献した古例を有する他社に比類のない古社であって、当社が遠州織物の発祥の地として、遠近の崇敬を集めているも偶然ではない」

神御衣は初生衣神社のおんぞ祭が終ると、豊橋市湊神明社へ送らます。

古くは舟で新居の大倉戸まで行き、そこから陸路潮見坂を越えて三河吉田（現豊橋市）まで、それ以前は田原街道をそのまま西に伊良湖まで行くルートがあったようです。明応の地震で街道が壊滅してからは、初生衣神社を後にし、御衣の唐櫃は、嵩山で休息。牛川の深川稲荷で吉田の町役人に渡され、湊神明社に向かいます。

祭祀中心の三ヶ日のおんぞ祭と違い、吉田のおんぞ祭は、これが同じ祭かと思うほど、華やかで賑やかで、若い娘たちが踊り狂い、城下町吉田は、熱狂の渦に。さりげない見合い・良縁求めて娘たちは踊り明かしたといいます。吉田おんぞ唄というものがあります。

♪ョイョイ出處は岡本さまよナー田町お宮へ踊りこむ♪

唄の始めに三ヶ日の岡本が出てきます。この祭の最盛期は享保頃といわれています。風待ちをし、吉田湊から伊勢に向けて出帆。朝に出れば夕方には到着したようで、途中伊良湖に立寄り、おんぞ祭りをしました。現在でも伊良湖神社ではおんぞ祭を行っています。

大野神社の内に服部神社あり

↓赤引きの糸を紡ぐ

初生衣神社 ↓ 織殿で御衣にする

浜名惣社の天棚機姫命社に納める

その後、初生衣神社に戻り本祭り

↓

牛川熊野神社 深川稲荷

吉田の町役人に引き渡し

↓

吉田湊神明社

唐櫃が届き神職が受け取る

↓ おんぞ祭

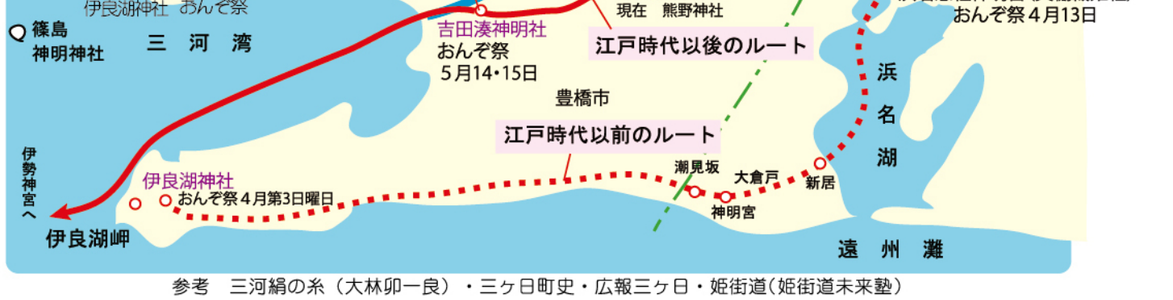
伊良湖神社 おんぞ祭

伊勢神宮への赤引の糸を紡ぐ人が身を清めたことから赤引温泉と呼ばれようになった。

初生衣神社から御衣が入った唐櫃は、吉田の町役人に引き渡されるとき、肩から肩へ地に置いてはならぬといわれていた。

江戸時代の吉田のおんぞ祭
女性が４日間町を練り歩いた

赤引き糸を受け取り「織殿」で織る



参考　三河絹の糸（大林卯一良）・三ヶ日町史・広報三ヶ日・姫街道（姫街道未来塾）